



学力の基礎は国語の力

「地頭(じあたま)をつくる上で最も重要な学力は国語力です。日本語はあらゆる教科を学ぶベースであり、国語力と子どもの成績は比例するものです。」

これは、『「親力」で決まる!』『「プロ親」になる!』などの著書で知られている親野智可^{おきのちから}等先生の言葉です。確かに私たち教師は、子どもたちにこの国語力、特に言葉の力が必要なことを痛切に感じる場面に多く出会います。例えば、社会科学習では、教科書にたくさんの漢字が出てきます。漢字をしっかりと身に付けておかないと、意味がわからなくなります。読むことすら難しい場合もあります。また、普段使わないような言葉、「人口密度」「輸入」「貿易」など、いわゆる『学問の言葉』が登場します。理科もかなり専門的な用語が出てきます。これらを身に付け理解するためには、本を読んで覚える必要があります。算数でも文章問題を理解して式をつくるには、言葉でイメージを浮かべなければなりません。計算力だけではいけないのです。

国語力、言葉の力を高めるために、読書は有効な方法です。かつて『ドラゴン桜』というドラマの中で国語の特別講師の芥川先生がこんなせりふを言いました。

「実力がないうちは国語でも英語のように暗記が大切です。暗記物は、努力すれば必ず点に結びつきます。」

言葉をたくさん身に付けた人は理解がスムーズになり、考える力も高まると思います。そのために、いろんな言葉を読んで書いて覚えていくことが基礎段階ではとても大切です。

言葉には2つの役割があるといいます。一つは「思考」、もう一つは「他者とのコミュニケーション」です。思考するための言葉は、本から学ぶ。そして、コミュニケーションとしての言葉は、親子の会話から学んでいきます。私たちはものごとを考える時、言葉で考えます。これは、話し言葉よりも書き言葉、つまり本に書かれているような言葉で「思考」します。やはり、読書をするのが大切になります。考える力をつけるには読書は欠かせません。

子どもたちのコミュニケーション能力の低下が叫ばれて久しいですが、家庭でのコミュニケーションがうまくいかなかったり、不足していたりする場合もあるでしょう。親子のコミュニケーションは対人関係のベースになると言われています。子どもの言葉にじっくりと耳を傾けて、しゃべらせるようにしてあげること、うなずいたり、相づちをうったり、共感的・受容的に聞いてあげることが大切です。会話を楽しむことによって、表現力や聞く力も養われてきます。

学校においては、読書の時間の指導、言葉の意味調べ、漢字の読み書き、短文・長文の記述をするなど、言葉の力を高めるための学習を継続的に行っています。

子どもにとって小学校時代は記憶力の高まっている時期。子どもたちにたくさんの言葉を身に付けさせたいものです。どうかご家庭におかれましても、読書などで活字に触れる時間、家族とのコミュニケーションの時間などを大事にさせていただきますようお願いします。

